

目 次

はじめに

山内和也	iii
------	-----

総序 吉田 豊	1
---------	---

第Ⅰ部 ソグド語の「古代書簡」

吉田 豊	5
------	---

第Ⅱ部 ソグド語断片研究

吉田 豊	61
------	----

総序

帝京大学文化財研究所 吉田 豊

本書では、4世紀初めに中国にいたソグド商人やその家族が書いたソグド語の手紙で、一般に古代書簡と呼ばれている資料の日本語訳と、日本とロシアに保管されている、トルファン出土のソグド語写本で、未発表のままになっている小断片についての筆者による最新の研究が収録されている。

はなはだ統一性のない組み合わせで恐縮するが、これは日本で長年ソグド語を研究してきた筆者の個人的な事情によるところが大きい。1954年生まれの筆者は、ソグド語を研究しておおよそ50年になる。研究を始めたきっかけの一つは、当時の日本にはソグド語の専門家がないことであった。ソグド人はシルクロードの交易の民として日本では有名で、高校の世界史の教科書でも取り上げられている。唐王朝の屋台骨を揺るがした安史の乱（755～763年）の首謀者である安祿山はソグド人であるということもしばしば話題になる。また、ヨーロッパの列強によるシルクロード探検が盛んに行われた20世紀初め、日本から西本願寺の第22代門主大谷光瑞が大谷探検隊を派遣した。その将来品の中にソグド語の断片も含まれていて、戦後は龍谷大学図書館に保管されていた。1960年代になって、それらの簡単なリストはウイグル語文献の専門家によって作成されていたが、私がソグド語研究を始めた1970年代後半には、内容の解明はまったく手つかずの状態だった。私は日本でソグド語を研究する者として、是非ともそれらの内容を明らかにしなければならないと考えていた。その一方で、日本に限らずヨーロッパの研究機関に保管された貴重なソグド語文献の学術研究に耐えるレベルの日本語訳を、日本の東洋史研究者に利用可能な史料として

提供することもまた重要な責務であると理解していた。

幸いにも龍谷大学図書館所蔵の断片は、百済康義および W. Sundermann との共著『イラン語断片集成 大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵中央アジア出土イラン語資料』京都1997においてすべて発表することができた。出版後新たに見つかった大谷資料である、西厳寺橘文書に含まれるソグド語断片を収録する本書の出版をもって、日本に保管されているソグド語文書の全点を発表するという、私の生涯の目標の一つはほぼ達成されたことになる。しかしながら東洋史研究者のための史料となる、ソグド語の世俗文献の信頼できる日本語訳を提供するという目的は、まだ十分には達成できていない。カラバルガスン碑文を始めとする、重要な金石文の類いはほぼすべて解説を発表してきているが、8世紀のムグ文書と4世紀初めの古代書簡という一定の分量がある極めて重要な世俗文書については、わずかな部分訳（『世界史史料 3』岩波書店2009などに収録）を除いて日本語訳を提出したことがない。勿論のことだが、欧米の研究者による解説成果が発表されているので、興味のある研究者はそれを利用すれば十分に事足りる。それでも、社交辞令とはいえ私の日本語訳を望む方もいて、一度ならずその要望を聞いたことがある。そして何よりそれを私の使命の一つと考えてきた。

本書は本来、西厳寺橘資料のなかのソグド語断片を初めとする、単独では発表しにくい未解説の極小断片を集めて校訂するために構想したものであった。実際2024年2月に科研費の報告書として簡易製本し関係者に配布している。しかし、これらの極小断片はソグド語の専門家でさえ関心を持つとは考えがたいから、およそソグド語を読まない人たちが興味を持つはずもない。そういう人たちにも手に取ってページをめくっていただけるようにするために、ソグド語資料の中では最も重要な古代書簡の全訳を本書に収めることにした。

原典との対照によって意味が確定するということもあって、ソグド語の言語面での研究は8～10世紀の宗教文献（仏教、マニ教、キリスト教）をもとに行われてきたという経緯がある。ここに収録した断片は大半がマニ教文献であるが、研究者はこのような一見すると無味乾燥な断片を、ときには小さい断片どうしを接合しながら解説して、ソグド語に対する知識を蓄積してきているので

ある。実際今回翻訳を提出する古代書簡 IV のなかの意味不明の物品名 tryh が、「薬品として結石」を意味することは、これらの10世紀のマニ教文献断片の最新の研究によってあきらかにされた。西巖寺橘文書には極小断片ながら、ソグド語の飲み物を表す語のリストがあって、そこには暖めたワインを意味する語 mδpyx が初めて見つかった。この語は古代書簡には現れないが、対応する表現はニヤのカローシュティー文書にも見えているから、古代書簡の時代のソグド人も知っていたに違いない。帝京大学文化財研究所が発掘しているキルギスのアク・ベシム遺跡との関連では、出土貨幣のなかに従来「Tukhus コイン」と呼ばれてきた方孔銭が見られる。この名前は、コインの銘文を txwsš と読んで、10世紀のイスラム資料にこの地域いたとされる Tukhsi 族と関連する語とみなしたことに由来し、広く一般に認められていた。ところが、故内藤みどり先生が所蔵しておられたこの種のコインを見せていただいたとき、筆者はそこにある銘文が、トルファン出土のマニ教文献の奥書に見える人名 wn'ntm'x と同じであることに気づきその読みを発表した。現在は筆者の読みが採用され、Tukhsi 族と関連は問題にならなくなった。

要するにここに収録した断片は零細であり、多くの場合特に重要な情報を含むものではないが、そもそも資料の全体量が少ないソグド語の研究では、決して放置して良いものではないのである。断片どうしが接合できる場合も少なくなく、異なる国に保管された断片どうしが接合する事例もある。断片の大半は漢文仏典の紙背を二次利用して書写されている。断片を接合する作業では、漢文面の情報（どんな仏典のどの部分か）は極めて重要な鍵になる。本書の第Ⅱ部3章には、すでに発表された断片の漢文面の情報をデータベースとして収録し、今後類似の断片を研究する人のための便宜とした。

第 I 部 ソグド語の「古代書簡」

吉田 豊

第 I 部 目 次

1 章 古代書簡の翻訳と訳注

- 1 ソグド語の古代書簡の紹介と研究史概観 9
- 2 レイアウト 14
- 3 日付と発信地など 17
- 4 翻訳と訳注について 19
- 5 翻訳
- 古代書簡 I 19
- 古代書簡 II 21
- 古代書簡 III 27
- 古代書簡 IV 30
- 古代書簡 V 31
- 古代書簡 VI 34
- 古代書簡 VII 34
- 古代書簡 VIII 35
- 6 おわりに 36

2 章 古代書簡の歴史的背景とシルクロード交易など ：書簡 II の syskwny をめぐって

- 1 はじめに 37
- 2 25-29行目のテキストと翻訳：Sims-Williams の訳と吉田訳の違い 39
- 3 張軌と司空 42
- 3-1 prβtm βypwr と古代書簡 II の年代問題 44
- 4 古代書簡の日付と司空の位が与えられた日付との関係 46
- 5 ここまでのまとめと「syskwny = 使君」の可能性 48
- 6 その他の問題 50
- 6-1 古代書簡に見られるいくつかの表現・語彙の
歴史的背景について 51
- 6-2 n'p の具体的な意味について 53
- 6-3 商品名について 54
- 7 おわりに 57

第 I 部の文献表 59

1章 古代書簡の翻訳と訳注

1 ソグド語の古代書簡の紹介と研究史概観

シルクロードの交易の民として有名なソグド人がソグド語で残した文献の中では、Ancient Letters（古代書簡）と呼ばれる手紙が最も有名である。これは A. Stein が1907年に、敦煌の西にある玉門関を守るために漢代の長城沿いに設置された烽火台の遺跡の一つ（T. XIIa）で発見したものである。（図 1-2）発見当時は未開封の状態で放置されていた。紙に書かれているが、見つかった場所が前漢から後漢にかけて使われていた烽火台であったことから、発見当時は後漢の時代の手紙ではないかと考えられていた。そして蔡倫が紙を発明したとされていた西暦105年からそれほど隔たっていない時代の紙で、当時としては世界最古の紙とも見なされていた。

見つかったのは、ほぼ原形をとどめる5点（AL I, II, III, IV, V）の手紙と、原形は失われているが両端が残る2点（AL VI, VII）と断片化した1点（AL VIII）の8通分の手紙であった。1931年になって、ドイツのイラン語学者の H. Reichelt（1931）がこれらの手紙を解読し、その写真も発表した。当時ソグド語研究はようやく端緒に就いたばかりであった。しかも解読されていた文書の大半は8世紀以降のものであった。これらの手紙はそれらより遙かに古く、書体も言語も8世紀以降のソグド語とは相当異なっているから、Reichelt がこの時点で、曲がりなりにもこれらの手紙を解読できたのは驚嘆すべき偉業であった。実際、本稿で扱う書簡 II を除く残りの手紙は、実に21世紀になるまで改

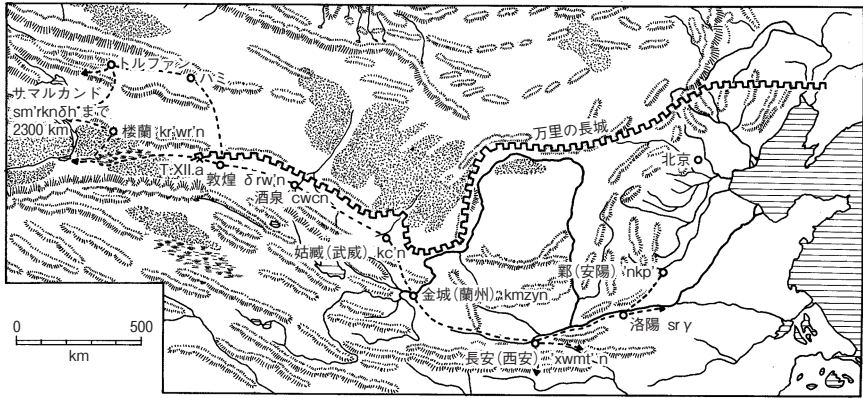


図 1-1 古代書簡に関する地図 (1): 中国北部

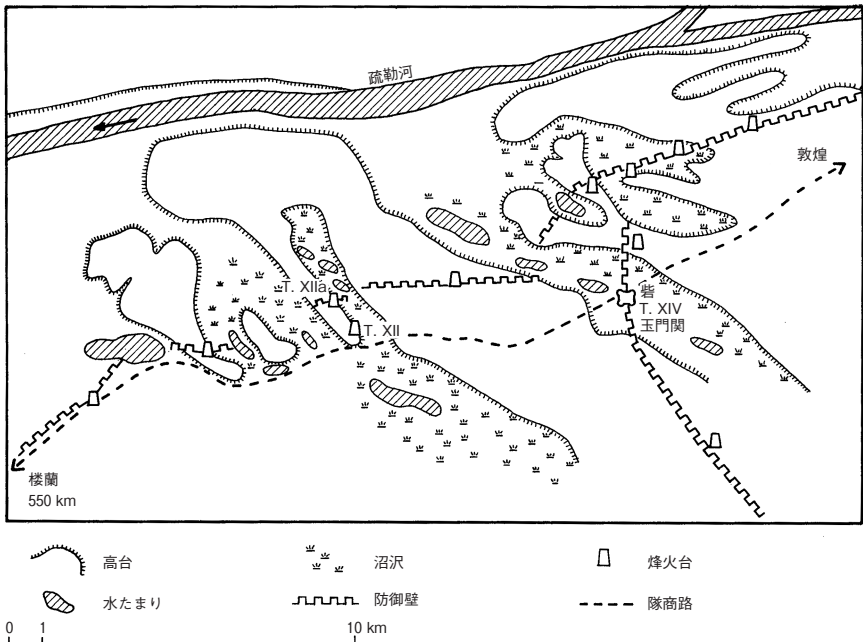


図 1-2 古代書簡に関する地図 (2): 発見場所
Grenet and Sims-Williams (1987, Figs. 1 & 3) をもとに作図

訂版が出されることはなかった。

Reichelt の研究を書評した P. Pelliot (1931) は、これらの手紙の内の2通目、Ancient Letter II (古代書簡 II) に皇帝が洛陽を放棄したとあることに注目し、後漢の終わりの事件との関連を指摘した。その後、1948年に W. B. Henning は、“The date of the Sogdian Ancient Letters” (*BSOAS*, 12/3, pp. 601-615) と題する論文を発表し、古代書簡 II のなかの、年代比定に役立つと考えられる部分を解説しなおし、手紙が書かれた年代を改めて研究した。歴史上皇帝が洛陽を放棄した事件は3つあって、Pelliot が言及した後漢末の190年に董卓が献帝を長安に連れ去ったとき、西晋の永嘉の乱の間の311年に懷帝が逃走した時、そして北魏時代の534年に孝武帝が関中の宇文泰の元に逃走した時である。Henning はそれら時代の事件と古代書簡 II の内容を比較した上で、ぴったり対応するのは311年でしかあり得ないことを証明した。例えば、書簡には洛陽も鄴もなくなったとあり、鄴が洛陽に匹敵する大都市であったことが知られるが、190年頃の鄴は洛陽に匹敵する都市にはなっていない。鄴が洛陽に匹敵する大都市であり、しかもそこが壊滅したのは307年に汲桑が略奪の後ここに火を放った時であった。一方534年の頃は、鄴が洛陽に代わって繁栄し始めるころであった。

これで古代書簡の年代問題に決着がついたかに見えたが、異を唱える研究者もいた。我が国の藤枝晃 (『文字の文化史』1971, 講談社学術文庫版 1999, p. 168) は、敦煌文書をはじめとする西域出土の中国紙を実見した経験から、古代書簡の紙は4世紀はじめの紙としては上質で薄すぎるとして、4世紀より後の時代に属するとした。洛陽から天子が逃げ出すような事件は他にも少なからず起きているとも言っている。藤枝の年代比定案は、『文字の文化史』という、一般向けの教養書の中でエピソード的に触れているだけで、学術的な論証を伴ったものではなかった¹⁾。それでも1976年の段階で護雅夫は、やはり一般向けの新書 (『古代遊牧帝国』) の中で、この藤枝の年代比定と Henning のそれを比較してどちらを採用すべきか自分では判断できないと述べている。護

1 誤解がないように藤枝の文章を引用しておこう：「一九六四年にロンドンを訪れたとき、大英博物館でとくに

(1976, p. 176). これが当時、漢文史料に精通するだけでなく、西欧で行われていた研究にも目配りすることができた、日本の最も上質の東洋史学者の対応だった。

1976年になって、ハンガリーのイラン語文献学者の J. Harmatta は、古代書簡 II の全文を翻訳し直した上で、Henning の説を退け、後漢末説を改めて支持した、Harmatta (1979). その根拠は烽火台の遺跡で古代書簡と併出する文字資料が漢代の木簡であることで、それらの年代に近づけようとしたのであった。Harmatta (1979a) はまた古代書簡 II の新しいテキストと翻訳を提出したが、独自の翻訳を支持する註釈を一切提出していないという点で、学術的な研究としては大きな問題があった。ただ古代書簡が未開封のまま放置されていたのは、手紙を運んでいたソグド商人が烽火台で国境警備に当たっていた中国人兵士に取り上げられ、放棄されたものだとする Harmatta の説明は、説得力があるものとして一般に受け入れられている²⁾。

こうして、Harmatta の論文以降、古代書簡の年代問題はいったん振り出しに戻った観があった。しかし、1987年になって、イラン学者でイスラム以前の中央アジアの考古学が専門の F. Grenet とソグド語学者の N. Sims-Williams が共同で論文を発表し、皇帝が洛陽から逃走した3つの事件と書簡 II の内容を比較して、190年の事件や534年の事件とは一致しないことを改めて確認した。また烽火台で出土する文字資料の年代のばらつきを精査して、古代書簡の年代は併出する資料とは関連付けられないことも示している。料紙の厚さについて

これら一群の文書を出してもらった。すべて二枚のガラスで挟んで保存してあったが、どれもきわめて薄手の中国製黄麻紙に書かれてある。黄色もかなり鮮やかである。この手の紙が現れるのは六世紀になってからである。五世紀の麻紙はここまで薄くない。右の文書の年代については、ただ「天子が洛陽を逃げ出した」事件だけが決めてで、他に根拠はない。それだけのことなら五胡十六国の間に何度かあった。注目すべきはガブという地名で、洛陽と並べるからには、北魏の都であった鄴に違いない。それならば、右の手紙は北魏末期の混乱を語った話となり、河陰の変（五二八年）か、東魏の分裂（五三四年）あたりと見れば、文章も通り、紙質とも矛盾しないことになる。たとえ、この比定が間違ったとしても、この紙質は四世紀初めのものであり得ないことだけは確かである。」奇妙なことに、xwn として書簡 II に記され、Henning が注目していた匈奴、すなわち前趙（漢）、が果たした役割は完全に無視されている。

- 2 別稿（吉田2025）でも論じたように、当時河西地域を支配していた前涼政権はシルクロード交易を禁止していたとは考えられないから、古代書簡を運んでいたソグド人は強盗に襲われたのであろう。

は、敦煌文書の紙について造詣の深いフランス人の J.-P. Drège の助けを得ている。Drège はガラス板に挟まれた紙を取り出し厚さを計測した上で、古代書簡の料紙は藤枝が問題にするほど薄くはないことや、知られている 4 世紀の紙と比較できることを指摘している。

日本では、1980 年 4 月に刊行された『講座敦煌 1 敦煌の自然と現状』「IV 外国人の記録に見える敦煌：二 ソグド商人の手紙」として、榎一雄がスタインによる発見の経緯や 1979 年までの研究史を解説している。その後に蔦勇造が、古代書簡 I, III, IV, V, VI を Reichelt のドイツ語訳から重訳している。書簡 II については、当時は最新の Harmatta の翻訳に基づき、適宜 Henning の翻訳を参照したとしている。当時としては最善の紹介であったと言える。

西暦 2000 年頃から、古代書簡の改訂版が Sims-Williams および共同研究者によって順次提出されていたが、2023 年になって全点のテキストと翻訳、訳注、語彙が、古風なソグド語資料の集成である N. Sims-Williams, *The “Ancient Letters” and other Early Sogdian documents and inscriptions*, London, 2023, pp. 25-62 に収録された。そこには古代書簡の年代や歴史的背景を論じる F. Grenet, “Remarks on the historical interpretation of the Ancient Letters”, *ibid.*, pp. 63-69 の解説も添えられている。当然ながら、今回筆者が本書で提出する日本語訳は、全面的にこの 2023 年の研究に基づいている。古代書簡の中ではとりわけ商業との関連が強い書簡 II と書簡 V は、2000 年頃に Sims-Williams が改訂版を発表していた。書簡 V の改訂には、F. Grenet と E. de la Vaissière も加わっていて、その歴史背景について考察を加えている、Sims-Williams et al. 1998 [2001]。この二通の書簡は後に de la Vaissière の著書 *Les marchands sogdiens*, 2002 にフランス語訳が発表され、ソグド商人の活動との関連で内容面の詳しい検討が行われている。de la Vaissière の著書の 2004 年の改訂版（2016 年に第 3 版）は 2019 年になって影山悦子により和訳されたので³⁾、二つの書簡の最新の日本語訳と de la Vaissière による歴史的背景についての詳しい分析の日本語訳を見ることができるようになった。当然ながら 2023 年の著書

3 古代書簡の日本語訳に際して筆者もいくらか助言を与えた。

ではさらなる改定が加えられているので、それをもとにしている今回の日本語訳は、影山訳とも多少の違いがある。

2 レイアウト

筆者自身はソグド文字が横書きから縦書きに変化する時代を議論するなかで、古代書簡のレイアウトに注目した、Yoshida (2013)、吉田 (2014)。ちなみにソグド文字は6世紀後半には確実に縦書きになっていた。古代書簡では書簡Ⅱを除いて、すべて一見すると奇妙なレイアウトに従っている。それは、アケメネス朝時代のアラム文字・アラム語の手紙と同じレイアウトである⁴⁾。右から左に横書きするアラム文字で書かれた手紙は、横長の長方形のパピルスあるいは羊皮紙の中央より右寄りの、右端にいくらかスペースを残す位置から書き始める。行が下端に達すると、残りの部分は右端に残されたスペースに書き足す。その際、料紙を時計回りに90度回転させ、狭い方の辺に沿って書き進める。横長の状態で見ると、右端のスペースに書かれた文字は上から下に進んでいくように見える。ソグド語の古代書簡は1例を除いてすべてこのレイアウトで書かれているので、この時代はまだソグド文字が横書きであったことが分かる。書簡Ⅱだけは例外で、縦長の料紙の右上の端から短い辺に沿って相対的に小ぶりの文字で下端までびっしり書いてある。本文は下端の60行目で終わっていて、ウラ面に日付が書かれている。書簡Ⅱが他とは異なるレイアウトで書かれている理由は分かっていないが、情報量の多い手紙を1枚の紙に収めるための特別措置であったようにも見える。勿論アラム語の手紙にもこのレイアウトは存在した。

古代書簡のレイアウトについて述べたついでに、外形についても触れておく。用紙はどれもほぼ同じサイズで、短い辺が25cm程度（当時の一尺）、長い辺は41cm前後の中国紙である。宛名は裏面に書かれる。手紙の本文を書き終わった後、手紙文の側を内側にして半分に折り、それを今度は短冊形に折る。

4 ギリシア文字で書かれたバクトリア語の手紙でもこのレイアウトは同じであり、アケメネス朝の書記の伝統が残っていたように見える。ただし左から右に横書きするバクトリア語の手紙のレイアウトは、アラム語やソグド語の手紙のそれと鏡像関係になっている。

折り目は十数本程度であるが一定していないようだ。料紙の短い辺の2分の1の長さの短冊形にして、その中央を細い糸で縛る。封泥はない。糸から少し離れた両側にジグザグの線を書き、その外側に宛名と差出人の名前などを書く。宛名と差出人の左右の位置は決まっていないようで、どちらも認められる。

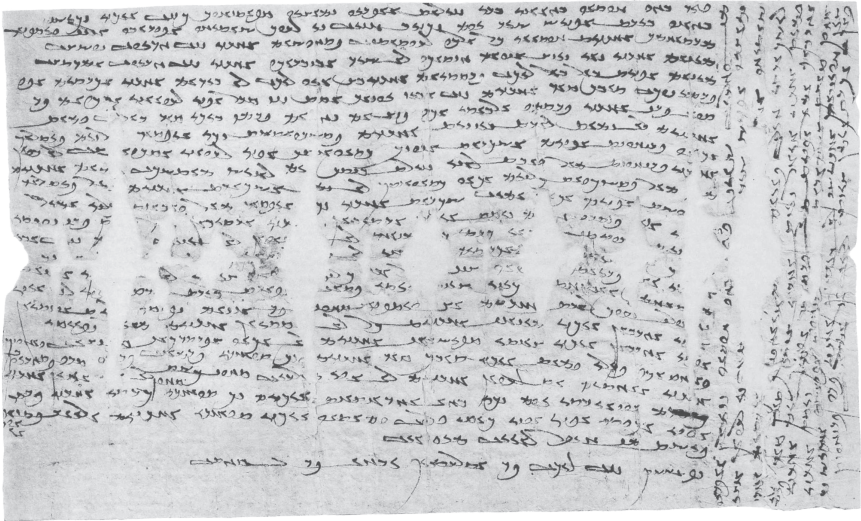


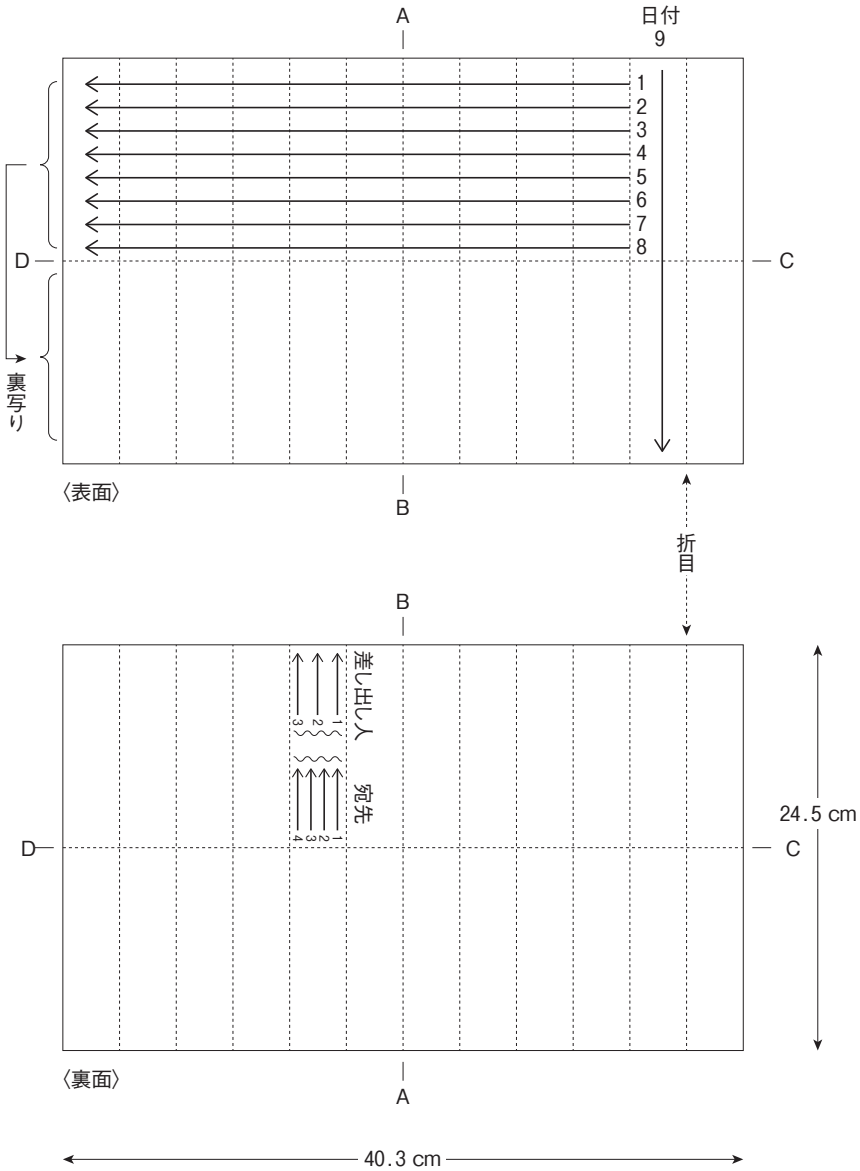
図2 書簡Ⅲ

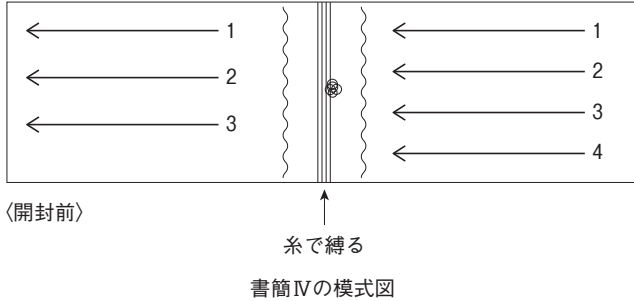
(Stain, A., *Serindia* Vol.4 [公益財団法人東洋文庫蔵])

図3 書簡Ⅲの開封前

(Stain, A., *Serindia* Vol.4 [公益財団法人東洋文庫蔵])

書簡Ⅳの模式図





3 日付と発信地など

ここで古代書簡の日付を見てみよう。サマルカンドに送られた古代書簡Ⅱ以外は、中国暦に従い、月と日だけが指定されている。年の指定がないのは、宛先が近く、宛先に到達するのに日数がかからないためだと考えられるが、それはまた同じ（タイプの）暦を使っている地域間のやりとりであったことをも示唆する。また送り先の地名も記されていないので特定の一つの場所に送られたと推定できる。これらは一般には楼蘭にいる受取人に向けて送られたものと考えられていて、その推定に問題はない。実際楼蘭でも、古代書簡と同じ時期の手紙の断片が出土していて、*Early Sogdian*, pp. 71-81にテキストと翻訳が提出されている。確かに楼蘭にはソグド人のコミュニティーが存在したのである。

下に当時の中国暦の日付に対応する西暦（ユリウス暦）の日付を添えた。2種類あるが、はじめのものは Henning が割り出した日付で、後のものは、その翌年の場合を想定した日付で筆者が加えた。推定される年は、ユリウス暦312年あるいは313年の場合（中国暦十月に書かれた古代書簡Ⅳ）、及び313年あるいは314年の場合（古代書簡Ⅲ, Ⅴ）である。

古代書簡Ⅰ：日付なし（ただし、この手紙の差出人は古代書簡Ⅲと同一

人物)。敦煌で書かれた

古代書簡 II : cyrδsw'n 王の13年 tȳm'yc月⁵⁾ (西暦312~315年では, ユリウス暦の6月6日から7月5日に対応する⁶⁾); 手紙が書かれた場所不明 (Henning は cyrδsw'n を「酒泉」の音写と理解して, 酒泉で書かれたと考えたが, この同定は後に否定された。Grenet は張掖を推定する⁷⁾)

古代書簡 III : 三月十日 (ユリウス暦313年4月21日 / 314年4月10日⁸⁾); 敦煌で書かれた

古代書簡 IV : 十月十五日 (ユリウス暦312年11月30日 / 313年11月19日⁹⁾); 手紙が書かれた場所不明 (Grenet は酒泉を推定する¹⁰⁾)

古代書簡 V : 三月三十日 (ユリウス暦313年5月11日 / 314年4月30日); 姑臧で書かれた

古代書簡 VI : 某月二十六日; 手紙が書かれた場所不明 (Grenet は敦煌を推定する¹¹⁾)

古代書簡 VII : 某月十五日; 手紙が書かれた場所不明

古代書簡 VIII : 日付部分は破損; 何処で書かれたかも不明

5 対応する中国暦の日付は以下の通りである: 311年では中国暦の五月五日から六月四日まで; 312年では中国暦の四月十六日から五月十五日まで; 313年では中国暦の四月二十六日から五月二十六日まで; 314年では中国暦の五月七日から六月七日まで

6 Henning 1948, p. 614, n. 1 に従う。

7 西方に送られる手紙は, 河西のソグド人聚落を東から順にたどってピックアップされ, 敦煌から外地に向けて送付されたという前提に立つと, 敦煌で書かれた書簡 I, III の日付が一番遅く, 姑臧で書かれた書簡 V の日付が最も早いことになるという推定に基づいている。Grenet は, 書簡 V は313年に, 書簡 I, III は314年に書かれたと考えた。書簡 II の日付は, その中間にあるので, 彼の論理に従えば, 書簡 II は敦煌と姑臧の間にある都市で書かれたことになる。その中で有力な候補として張掖を想定している。確かに, 敦煌から発信された書簡 III には差出人の娘が書いた追伸が添えられていて, 宛名の部分も本来のものとは別に書き足されているので, 慌てて書かれたようだ。手紙を運ぶキャラバンの出発に間に合うように急いで書き足されたような印象を与えるので, 書簡 III が他のすべての書簡より遅く書かれたであろう。ただ当時のソグド人たちの郵便の集配やネットワークの実態が分からない以上, 他の手紙が書かれた場所を, 日付だけをもとに推定できるかどうか分からないのではないか。

8 Grenet は4月21日とするが誤解である。Henning が313年の場合を想定して割り出した西暦の日付が314年にも当てはまると誤解している。

9 ここでも Grenet は誤解して11月30日だとしている。

10 日付を考慮して書簡 II が書かれたと推定する張掖の西の都市を推定している。

11 書簡 VI には楼蘭に行くように命令されていたことが記されており, 楼蘭に最も近い都市を推定している。